

## 源信記『菩提心義要文』の散逸部分に関する考察

——高山寺所蔵の院政期写本に基づいて——

小山 昌 純

はしがき

『菩提心義要文』は永らく散逸していたが、昭和四十三年、佐藤哲英博士により紹介された資料<sup>①</sup>で、長徳三年（九九七）九月、源信（九四二—一〇一七）が（伝）龍猛撰『菩提心論』を基に、菩提心の要文を集めたものである。本書の原本は藤岡薫氏所蔵（現蔵者は藤岡新造氏）の卷子本（以下「藤岡本」）で、平安時代末期あるいは鎌倉時代の写本と推定されているが、巻首を欠くため全体の内容を知ることができない。筆者は予てより本書の全貌を知りたいと思い、「菩提心義要文」がどこかに所蔵されていないかと注意を払ってきたところ、明恵上人（一一七三—一二三三）で知られる高山寺が「菩提心義要文」なる院政期の古写本（以下「高山寺本」）を所蔵していることを知ったのである。本書と藤岡本とを比較したところ、本書は本文的に藤岡本と一致し、藤岡本で欠落していた巻首部も具わっていることが確認できたのである。そこで小

論では高山寺本に基づいて、従来より不明の巻首部について若干の考察をまじえて報告するものである。

### 一、高山寺所蔵の『菩提心義要文』について

高山寺本は表紙に「重文第一部」と示される貴重書である。本書の法量はおよそ縦二五・四センチ、横一四・三センチ、厚さ九ミリの粘葉装の冊子本で、一頁八行、一行二十二字前後で書写されている。

【外題】<sup>㊦</sup>菩提心義要文【内題】菩提心義要文【撰号】×【内題下】所引文或<sup>不</sup>次第或略【序文】×【奥書】我今信樂心性理。清淨菩提滿月輪。<sup>願</sup>願於臨終得正念。面見無量光仏身。即往安養嚴淨土。心中法門悉現前。周遍十方作仏事。恒為衆生解脫緣。【撰述年時】×

右のように『菩提心義要文』は本文（引用文の体裁）が次第しなかつたり省略されたりすることを内題下で断っているが序文はなく、内題の次の一行から本文に入っている。高山寺本の本文は四十三丁あり、前から約六丁分が藤岡本の散逸部分

に相当するから、藤岡本は残欠本<sup>(3)</sup>ではなく有欠本である。

## 二、高山寺本にみる散逸部分の引用諸文

散逸部分の本文は引用文の体裁で、源信の自記は注記の体裁でわずかに見られる。この点は藤岡本と同様である。以下に散逸部の引用諸文を示してみたい。<sup>(4)</sup>

1 菩提心論云。大阿闍梨云。若有上根上智之人。不樂外道二乘法。有大度量。勇銳無惑者。宜修仏乘。当発如是心。我今志求阿耨多羅三藐三菩提不求餘果。∴所以求菩提者。発菩提心。修菩提行。既発如是心已。須知菩提心之行相 (T三二・五七二b) c)。2 宝積經文殊初発心願云。我今自授記。決定当成仏。志業勝清淨。於此周固無疑 (T十一・三四六a)。3 華嚴經偈云。菩薩於生死最初発心時一向求菩提堅固不可動彼一念功德深広無涯際如來分別説窮劫不能尽 (T九・四三二c) 四三三a)。4 又云。有智慧人一念発道心必成無上尊慎勿生疑惑 (T十・一二四a)。5 又云。十方虚空界一毛猶可量菩薩初発心究竟不可測 (T九・四五八b)。6 同經云。譬如牛馬羊乳合在一器∴不住声聞独覺法中 (T九・七七八c)。譬如有人得住水寶珠∴入生死海而不沈没 (T九・七七七b)。譬如金剛於百千劫處於水中∴諸煩惱業不能斷滅亦無損減 (T九・七八〇a)。譬如閻浮檀金∴除一切智勝諸功德 (T九・七八a)。7 宝積經云。菩薩乘人。於恒沙劫受五欲樂遊戲自在∴而是菩薩所有煩惱漸漸当尽 (T十一・五一七a)。8 同經偈云。菩提心功德、若有色方分、周遍虚空界、無能容受者 (T十一・五四二c)。9 大般若經云。若諸菩薩雖多發起五欲相應非理作意而

源信記『菩提心義要文』の散逸部分に関する考察 (小山)

起一念無上菩提相應之心即能摧滅 (T七・一〇二〇a)。10 決定毘尼經云。菩薩乘人。以日初分有所犯戒。於日中分思惟。當得一切種智。菩薩爾時不破戒身。以日中分有所犯戒於日後分思惟。當得一切種智。菩薩爾時不破戒身。乃至以夜後分有所犯戒。於日初分思惟。當得一切種智。菩薩爾時不破戒身 (T十二・四〇〇a)。11 大論偈云。若初發心時誓願當作佛、已過諸世間應受世供養 (T二五・八六b)。12 菩提心論云。其行相者。三門分別。諸佛菩薩昔在因地。發是心已。勝義。行願。三摩地爲戒。乃至成佛。無時暫忘。唯眞言法中。即身成佛故。是故説三摩地於諸教中。闕而不言。一者行願。二者勝義。三者三摩地。初行願者。謂修習之人。常懷如是心。∴眞言行者方便引進 (T三二・五七二c) 五七三a)。13 文殊初発心願云。教爲一一衆生誓盡未來際受無量生死而作大饒益 (T十一・三四六a)。14 大般若經云一切有情皆如來藏普賢菩薩自體遍故 (T七・九九〇b)。15 大方等經云。一切衆生貪欲恚癡諸煩惱中。有如來智如來眼如來身。結加趺坐儼然不動。善男子。一切衆生雖在諸趣煩惱身中。有如來藏常無染汚諸相備足 (T一六・四五七b) c)。16 無行經云。姪欲即是道。恚癡亦如是。如此三事中。無量諸仏道 (T二五・一〇七c)。17 法句經依貪瞋 如座<sup>(5)</sup>於道場 塵勞諸仏種 本來無所動 (T八五・一四三五a)。18 宝積經云。菩薩摩訶薩。於一切時舉足下足∴繫念在前。(T十一・二七二b)。於一念中。欲令無量無辺世界所有衆生∴得発起增益無量善根。(T十一・五三二a)。19 同經偈云。長夜以慈悲。普念諸衆生。以是福德故。得見無量仏 (T十一・四五六c)。20 又云。仮使十方各如苑伽河沙等世界數量。∴而衆生 界<sup>(6)</sup>無量無邊菩薩慈

悉皆遍滿。(T十一・二三五b) c)。21又云。所集善根迴向一切是名具足利益衆生(T十一・四九八b)。22又云。乃至阿鼻地獄受諸苦痛。於冤家許。尚不應生瞋加害侵毀。何況人中受少苦惱。當生瞋害於他(T十一・五三一b)。23又云。若見衆生煩惱過失。等於菩提。是名菩薩善巧方便(T十一・四九八c)。24又云。衆生緣慈。初發大心菩薩所得。法緣之慈。趣向聖行菩薩所得。無緣之慈。證無生忍菩薩所得(T十一・二三六a)。25決定毘尼經云。爾時世尊告優波離。若有菩薩如恒河沙。：所有諸結能捨衆生。菩薩於此應生大畏(T十二・四〇b)。26略出經說菩薩。應於一切衆生。常生慈愍。哀矜示誨莫生厭離。(T一八・二五二b)。27華嚴經入法界品云。以大悲水。饒益衆生。則能成就阿耨多羅三藐三菩提(T十・八四六a)。28同經偈云。若有見(諸)菩薩修行種々行起善不善心菩薩皆撰取(T十・四一二c)。29大集經云。無上菩提及与大悲如是二法等無差別(T一三・十一b)。30法華經云。願成仏道。令衆亦爾(T九・三八a)。31往生論云。發菩提心者正是願作仏心。願作仏心者即是度衆生心。32莊嚴論偈云。菩薩念衆生。愛之徹骨髓。恒時欲利益。猶如一子故(T三一・六二三a)。33丈夫論偈云。悲心施一人。功德如大海：(T三〇・二五七b)。

以上、十五部三十三文の内訳は次の通りである。

- 經典(十部二十七文) 大宝積經(11) 華嚴經(6) 大般若經(2) 決定毘尼經(2) 大方等如來藏經・諸法無行經・法句經・大集經・法華經・金剛頂瑜伽中略出念誦經(各1)

- 論典(五部六文) 菩提心論(2) 大智度論・往生論・大乘莊嚴經論・大丈夫論(各1)

三、『菩提心義要文』の組織の再考

『菩提心義要文』は『菩提心論』に基づく①行願②勝義③三摩地のほか、源信が付け加えた④助菩提心縁⑤退菩提心縁から組織されると考えられてきた(次図上)。ところが高山寺本の巻首部を見ると、ちょうど前節の引用II(大論偈)末に「已上初志求心。此中經論：」とする源信の自記があるため、源信が引用II以前を「初志求心」(初発心)の一段に見たことがわかる。また引用12(菩提心論)に「其の行相とは三門分別す」として、行願・勝義・三摩地の三門分別が説かれるため、『菩提心義要文』の組織は次図下のように考えられる。

従来の見方	高山寺本に基づく見方
(一) 行願	(一) 初發菩提心(11)
(二) 勝義	(二) 菩提心行相(112)
(三) 三摩地	(三) 助菩提心縁(2)
(四) 助菩提心縁	(四) 退菩提心縁(8)
(五) 退菩提心縁	(三) 助菩提心縁(2)
	(四) 退菩提心縁(8)

※(一)内の算用数字は引用文数、点線内は『菩提心論』に基づく部分。

さらにまた『菩提心義要文』が引用する『菩提心論』を繋ぎ合わると、源信が『菩提心論』の本文展開どおり全文にわたって引用していることが明らかとなった。しかも右図の点線内において『菩提心論』は、各段落の先頭にて引用されている事実を考慮すると、源信が『菩提心論』を指南書として

本書を著したことを再確認できる。

#### 四、『菩提心義要文』と安然『菩提心義抄』

『菩提心義要文』と安然の関係については、従来より検討が加えられ、佐藤氏や兼子鐵秀氏は安然『菩提心義抄』の影響を認めている。しかし藤岡本には安然や安然の著述への言及ないし引用は見あたらず、三崎良周氏も『菩提心義要文』に安然『菩提心義抄』の影響を認めていない。<sup>9)</sup>

ところが高山寺本を見ると、新出の巻首部において、源信が安然に言及している部分がある。それは『菩提心論』(引用1)の引用文末に「安然阿闍梨云。大阿闍梨者文殊師利菩薩是也」と細注の体裁で記すものである。これは『菩提心論』冒頭にある「大阿闍梨」について安然は文殊菩薩(妙吉祥)の意味で捉えたことを源信が注記したものである。この源信の注記により、『菩提心義要文』の著述にあたり、源信が安然説を参照したことがわかる。安然の『菩提心義抄』を見ると「初云。大阿闍梨者是妙吉祥也。龍樹承二妙吉祥而造此論不空訳之」(754b c)とあって、大阿闍梨を妙吉祥(文殊)と述べるので、源信は安然の『菩提心義抄』を参照していたと考えることができる。

次に『菩提心義要文』の引用文に注意すると、引用2(前節参照)では「宝積經文殊初発心願云」として文殊菩薩の発心に関する部分を引用している。また「菩提心行相」段の①

源信記『菩提心義要文』の散逸部分に関する考察(小山)

行願門における『菩提心論』(引用12)の引用後も「文殊初発心願云」として『宝積經』を引用する。また『菩提心行相』段の②勝義門における『菩提心論』引用後も、文殊菩薩を対告衆とする<sup>10)</sup>「心地觀經」觀心品を引用し、また「菩提心行相」の③三摩地門における『菩提心論』引用後も「文殊師利菩薩白仏言」<sup>11)</sup>として『心地觀經』發菩提心品を引用している。いま『菩提心論』引用直後の源信の態度を紹介したが、源信は『菩提心論』引用直後に必ず文殊菩薩に関する部分を引用することが確認できた。源信の注記にある安然への言及と、文殊菩薩にこだわる源信の引用態度を考え合わせると、『菩提心義要文』には『菩提心論』を文殊の説とみる安然の立場が受け継がれているように考えられる。

#### 五、『菩提心義要文』と『往生要集』の対比

『菩提心義要文』と『往生要集』の対比は、八木吳恵氏や兼子鐵秀氏<sup>12)</sup>によって試みられ、引用文の重複は『往生要集』正修念仏・作願門に多く見出されている。

新出の巻首部における三十三文については、約半数の十六文が次のように『往生要集』で引用されていた。

#### 『菩提心義要文』『往生要集』『浄土真宗聖典』七祖篇

- ③華嚴經偈云：作願門 (『浄真聖』一〇三〇頁)
- ④又云：作願門 (『浄真聖』一〇二八頁)
- ⑤又云：作願門 (『浄真聖』一〇三〇頁)

- ⑥ 同経云： 作願門 (『浄真聖』一〇二七・二八・二九頁)
- ⑧ 同経偈云： 作願門 (『浄真聖』一〇三二頁)
- ⑨ 大般若経云： 作願門 (『浄真聖』一〇二七頁)
- ⑩ 決定毘尼経云： 作願門 (『浄真聖』一三六頁に類似文)
- ⑪ 大論偈云： 作願門 (『浄真聖』一〇三三頁)
- ⑫ 大般若経云： 作願門 (『浄真聖』一〇一四頁)
- ⑬ 法句経： 作願門 (『浄真聖』一〇一四頁)
- ⑭ 同経偈云： 助道入法 (『浄真聖』一三〇八頁)
- ⑮ 往生論云： 作願門 (『浄真聖』一〇〇八頁)
- ⑯ 莊嚴論偈云： 对治懈怠 (『浄真聖』一一〇五頁)
- ⑰ 丈夫論偈云： 作願門 (『浄真聖』一〇三六頁)
- このように正修念仏・作願門(14文)、助念方法・对治懈怠(1文)、問答料簡・助道入法(1文)と、作願門への集中が明らかである。新出の巻首部の検討から、『菩提心義要文』が『往生要集』作願門と深い関連を持っていることを再確認することができる。(結論省略)
- ※小論を草するにあたり、貴重な写本を拝見させていただいた梅尾山山主・小川千恵師のご厚意に対し衷心より感謝を申し上げます。

- 1 佐藤哲英(一九六八)「新出の源信記『菩提心義要文』の研究」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』(七)収録。
- 2 高山寺経藏典籍文書目録第一(高山寺資料叢書第三冊)東京

- 大学出版会、一九七三発行、一二四頁上。
- 3 佐藤氏は藤岡本を残欠本とする(佐藤(一九六八)一六頁)。
- 4 高山寺本は虫害が甚だしく文字の判読が容易でなく、筆者に許された閲覧時間も一年に一日であるため、正確な翻刻は困難である。よって、今回は引用範囲を示すにとどめた。また源信が引用文末に付ける注記(七箇所あり)も省略した。括弧内は大正新脩大藏経の該当箇所。引用文頭の算用数字も筆者の付加。
- 5 この文無行経になし。大智度論に同文あり。
- 6 (一)内の文字は大正蔵本にないが高山寺本にある。
- 7 この文『往生論』になし。道綽『安楽集』(『浄土真宗聖典』七祖篇二三〇頁)、『往生要集』(同書一〇〇八頁)にあり。
- 8 佐藤(一九六八)一六頁。 9 三崎良周(二〇〇〇)『菩提心義要文』『正統天台宗全書目録解題』。 10 大正三・三二六c。
- 11 『統天台宗全書』密教(三)一九七b。
- 12 『統天台宗全書』密教(三)二〇二b。
- 13 八木昊恵(一九九六)『恵心教学史の総合的研究』永田文昌堂、六九頁。兼子鐵秀(一九八九)『恵心僧都源信と密教』『印仏』三七(二)。兼子氏には他に兼子(一九八九)『恵心僧都源信と『菩提心義要文』』『天台真盛宗宗学研究所紀要』(四)収録の考察がある。

〈キーワード〉 源信、『菩提心義要文』、『往生要集』、安然、『菩提心論』

(龍谷大学非常勤講師)

126. The *Shikaku* (始覺) Idea in Medieval Tendai Doctrine

Kōjun MOMOO

This paper concerns the *hongaku* idea of medieval Japanese Tendai. A main problem is the meaning in which the word *shikaku* is being used. I first consider the meaning of the term in the *Dacheng qixin lun*. Then, I examine its use in a number of texts associated with *hongaku* thought. I conclude that the term is used in a variety of senses.

127. A Consideration of the Missing Section of Genshin's *Bodaishin-gi-yōmon*: Based on the Insei era manuscript owned by Kōsan-ji

Masazumi KOYAMA

For a long time, Genshin's *Bodaishin-gi-yōmon* 菩提心義要文 was thought to be no longer extant. However, in 1968, Satō Tetsuei 佐藤哲英 discovered a manuscript and introduced it to academic circles. This manuscript is thought to be from the end of the Heian era or the Kamakura era. However, because this manuscript lacked its beginning, the complete contents could not be known. In examining whether or not another copy of the *Bodaishin-gi-yōmon* existed someplace else, I learned that there was a copy in Kōsan-ji 高山寺. This research considers the missing section based on the manuscript owned by Kōsan-ji.

128. A Study of the Chinese Chan Master Nanyue Huairang (677-744)

Yoshiki MATSUBARA

There are three well known accounts of the Chinese Zen Master Nanyue Huairang (Jp. Nangaku Ejō): 1) he is the Dharma heir of the sixth Chinese patriarch Huineng; 2) he is considered by later generations to be an important figure as the teacher of monk Mazu Daoyi (Jp. Baso Dōitsu; 707-788); 3) according to the historical account *Baolin zhuan* (Jp. *Hōrin-den*; 801), he achieved his enlightenment under the instruction of the Master Laoan (Jp.